

『自分の考えを伝える作文練習帳 外国につながる生徒のための日本語』  
支援の手引き

本教材では Step の段階に沿って、考えて書くという作業を進めていきますが、その際、各 Step を進めるためのコツや補足などを参考資料として、こちらに掲載します。著者の経験からの提案にすぎませんが、参考にいただける点がありましたら幸甚です。

【支援の際のコツ、補足、留意点など】

全課に共通する点

(1) アイディア出しをする Step のとき

★頭の中で考えるだけでなく、アイディアや思い浮かんだこと、調べた情報等をひとつひとつ書きだして、それぞれを視覚化することを意識してください。

・アイディアを出す／一人でブレスト

ポストイットに思いついたアイディア(トピックやキーワード)を1つずつ書き出します。あまり考えすぎず、思いついたら、まず書き出すようにしてください。その中で、派生的に思い浮かんだことは線でつなげていきます。

本教材の例のように、キーワードを線で結んだり、共通点のあるものを集めたりすると効果的です。どれについて書くか、どの順番で書くかを決める際にも、ポストイットを貼りかえることで、視覚的に整理することができます。

・調べる

インターネットで情報を探す際には、日本語で検索する場合と、母語で検索する場合が考えられます。以下の工夫をすると、探したい情報に行き着きやすくなり、また以降の Step を行うための助けになります。情報は1つずつポストイットやメモ用紙に書いていくといいでしょう。

○日本語で検索する場合

- 1) 「やさしい日本語」を検索キーワードに加える。そうすることで、生徒が理解しやすい記事が見つかりやすくなります。
- 2) ヒットした web サイトから、文章の構成や長さなどが、できるだけシンプルなものを選ぶ。生徒の日本語力や検索経験の有無等を踏まえて、適宜、支援者もサイトを見ながら、選ぶサポートをします。
- 3) 翻訳アプリなどを使って、日本語の記事を一旦母語に訳し、内容理解を優先的に行う。このとき、生徒の日本語力と記事の日本語の難易度に大きく乖離があれば、支援者が適宜やさしい日本語にする。

○母語で検索する場合

作文に必要な情報を取捨選択し、その後、翻訳アプリなどを使って日本語にする。このとき、生徒

の日本語力と翻訳された日本語に大きく乖離があれば、支援者が適宜やさしい日本語にする。

#### ☞ 下線(支援者が適宜やさしい日本語にする)について

内容理解は生徒の知識を増やし、考える力の育成につながります。ですので、日本語、母語問わず、内容理解を促すことは大変重要です。また、その内容を生徒が理解して思考し、自分なりに咀嚼して意見を構築するときには、その話題や分野で使われる日本語の習得も重要になります。そのためには、生活言語と学習言語の橋渡しを考える必要があります。そして、抽象度や専門性が高まる話題で使われる日本語に導くためには、支援者のサポートが必須になるかと思えます。

一例として、8課で参考とした記事には、「この記録的な大雨により、福岡県、大分県の両県では、死者37名、行方不明者4名の人的被害の他、多くの家屋の全半壊や床上浸水など、甚大な被害が発生しました。」という文があります。「大雨により」や「甚大な被害」などは、「大雨で」「大きな被害」のように、生徒の知っている表現に直します。一方で、「全半壊」「床上浸水」といった語は、無理に直さず、写真、イラスト、ジェスチャーを使って説明したり、翻訳アプリを使ったりするといいでしょう。コツは「全壊」などの語についてはそのまま使い、「により」などの改まり度が高い表現はやさしい表現に言い換えることです。そして、「により」などの改まり度の高い表現は、言い換えた時点で、生徒にメモをとり覚えるよう促し、後日再確認するなどして、学習言語の習得を促すとよいでしょう。その際、その生徒の日本語レベルと性格を見ながら、負担になりすぎない程度で学べるようにしてください。

生徒が専門的な話題に入っていく、足場掛けとなる重要な作業だと気負いすぎずに、ひとつでも学びにつながれば……という気楽な気持ちで臨んでいただければと思います。

#### ・アンケート調査をする・表を読み取る

データや調査結果について、数字を示しながら報告(説明)する経験が初めてという生徒に対しては、支援者が表現のしかたを紹介する必要があります。支援者が例文を示し、その例文を使って生徒自身が作文で使用する数値を例文中の該当箇所当てはめる、支援者が作文で使う数値を説明するための表現を示すなど、担当生徒や状況に合わせて対応していただければと思います。

#### (2) 作文のアウトライン

アイデア出しや調べたことのメモから、すぐに作文にできそうな、整ったアウトラインを作るのは、生徒にとっては難しいかもしれません。その場合は、アウトラインのページを大きい紙に書き写し、そこにポストイットを貼りながら、アウトラインを考えていきましょう。なお、本冊の Step3で、フクロウが番号をつけることを促しています。番号をつけることで、提出順を調整したり、取捨選択したりしやすくなりますので、ポストイットにも番号をつけて整理するといいでしょう。

#### (3) 生徒の日本語力について

本教材の前付けにも書きましたが、この教材で大事なことは「生徒がその生徒なりに考え、理由とともに、ひとまとまりの文章にした」という事実です。その事実を最優先に考えれば、作文自体は初

級レベルで書くこともできるでしょう。本手引きの p.8 に、「1 課 興味があるポップカルチャー」の作文を初級後半レベルの日本語力で書いた場合の例がありますので、ご参考にしていただければと思います。

## 各課について

### 1 課

#### Step 2

##### トピックとキーワード

- ・ポストイットを使うと、とりあえず思い浮かぶキーワードを1つずつ書き出す、キーワードを線で結ぶ、共通点のあるものを集めて配置する、書く順番を考えて並び替える、などがしやすいです。
- ・生徒が「アイデア出し／一人でブレスト」を行ったあと、支援者はそれぞれのキーワードについて、少し深堀して（例えば「かっこいい」を選んだら、どんなところが／どんなときがかっこいいかなどを聞いて）いきます。それから、生徒に一番書きやすいもの、書きたいと思ったものを選びさせます。深堀の際に話した内容は、アウトラインに入れると具体性が高まるため、メモを残しておくように促すと良いでしょう。

#### Step 3

本文: 選んだキーワードについて、理由も入れて詳しく書く。

自分のよく知っていることについては、誰かに説明するときにかえって情報が不足してしまうことが多いです。例では、アニメやキャラクターの魅力だけでなく、それがどんなものかという説明も入っていますが、一度組み立てたアウトラインにもとづいて、他の人に話してみると、情報が不足している点が補いやすくなります。

### 2 課

#### Step 1

##### ことわざ

ことわざが思い浮かばない場合は母語や好きな言語を使いながらインターネットで各国の web サイトを検索し、翻訳アプリなどで日本語訳を調べてもいいです。作業は生徒が一人で、または生徒同士や支援者と一緒に進めるなど様々なケースがあるかと思いますが、その作業を進めるなかで、生徒の価値観や、選んだことわざにちなんだエピソードなどを引き出すと、それを作文に生かすことができます。

#### Step 2

##### タイトル

この課では、書く内容がことわざの説明に限定されますので、タイトルを自由に考えさせる形にはしていません。

本文: 好きな理由と具体例(経験など)を書く。→ 具体例(経験など)

- ・具体例はポストイットなどに 1 枚 1 エピソードとして、メモするとあとで取捨選択しやすいです。

- ・具体例をメモしたら、支援者や友だちに、どれがおもしろいか聞いて、それを参考にエピソードを選んでもいいです。その際、具体例が相手に伝わったかも確認し、伝わっていなければ、情報を追加するなどして、書くことを見直すようにしましょう。(自分がよくわかっていることは往々にして情報が不足しがちになります。)

### 3 課

#### Step 2

本文：歴史・作り方・人気の○○

- ・歴史や作り方を調べる場合、母国の web サイトで調べてもいいとします。その場合は翻訳アプリなどを利用して日本語に訳したものを参考に、生徒の日本語力に合わせた表現を一緒に考えます。
- ・日本の web サイトで調べる場合は、生徒の日本語力によって支援者が一緒に複数のサイトを開いて、生徒のレベルにあったシンプルでわかりやすいサイトを利用するといいでしょ。

### 4 課

#### Step 2

トピックとキーワード:

なかなか思い浮かばないときは、インターネットで健康について(例えば、課のタイトル「健康に過ごすために必要なこと・していること」で)検索し、気になったキーワードを取り出してみるといいです。『中学生のにはほんご 社会生活編』(以下、「テキスト」)が手元があれば、本文のキーワードも参考にできます。

#### Step 3

質問(5つくらい)

アンケートで何を知りたいかを明確にして、それに沿って質問項目を決めるようにします。質問の数が5つだと作文の目標字数 600 字程度になると思います。ただし、5つはあくまで目安のため、アンケートのトピックや目的によって適当な項目数にしましょう(それに伴い、文字数を増減させてもいいでしょう)。

#### Step 4

アンケートは、10 人程度を対象に行うと傾向が見えやすいです。少なくとも 5 人にはアンケートを行いたいところですが、数の確保が難しい場合は、教室外の人にも聞いてみましょう。

### 5 課

#### Step 2

トピックとキーワード

単なるふるさとの紹介ではなく、ふるさとの良さをアピールするために適した題材を選ぶこともこの課の目的です。例えば、城、温泉、酪農というような対象を複数挙げたあと、それについての感想や考えを話したり、情報を調べたりして、紹介するものを生徒自身が絞っていく課程が重要です。

## Step3

## 本文と全体

- ・アウトラインの本文は、フクロウの吹き出しでも触れていますが、選んだトピックによって、書く内容が変わります。例えば、城なら歴史や特徴などになるかと思います。温泉なら姫肌の湯という名前の由来や温泉の効能、訪れる人についてなどになるかと思います。トピックに合ったものが紹介できるよう、生徒に合わせて作業を進めてください。
- ・自分で web サイトなどから得た情報には、生徒が知らない語彙・表現もあると思いますが、覚えてから今後も使えるような語彙や表現は、積極的にそのまま使うことを推奨します。「全課で共通する点」でもお伝えしましたが、抽象度や専門性の高い話題で使われる日本語への橋渡しのためです。一方で、翻訳アプリや AI で生成された文章をそのまま書き写そうとする生徒もいるかと思いますが、その場合は、そのまま書き写しても日本語の習得につながらないので、意味を理解したうえで、使う必要があることを伝えてください。

## 6課

## Step 1

びっくりしたことが出てこない生徒には、本課テーマの「ふるさとと日本の違い」の方に焦点を当てて、何か気づいている違いについて話すよう促します。それでも何も浮かばない生徒には、学校の始業時間や昼休み、部活等の学校生活について問いかけてみたり、日常生活における、ご飯の食べ方など小さな事柄について問いかけてみたりして、ちょっとした違いに意識を向けるよう促すことも有効でしょう。

## Step 2

## トピック(エピソード)

ポストイットに1つずつ書き出していき、あとで類似したトピックを整理したり、どれについて書くか決めたりするのに便利です。どれにするか決める際に、捨てるもの、残すもの……取捨選択して絞っていくようにします。

## キーワード

思いついたトピック(エピソード)について、「どうしてそう思ったか」「いつ経験したか」「どんなことか」といった質問を投げかけて、その答えをキーワードとして書き出させます。

## 7課

7課で扱っている表ではなく、別の表を扱いたい場合、今までの課のタイトルで web 検索をしてみてもいいでしょう。例えば、1課「興味があるポップカルチャー 図表 中高生」4課「健康のために必要なこと・していること 図表 中高生」6課「日本で驚いたこと、違いを感じたこと 図表 中高生」などで検索するといろいろな図表にたどり着けるかと思います。(「画像検索」をすると、効率的に図表を探せます。)

**Step 2**

生徒が表やグラフに関する言葉に慣れていない場合は、アウトラインや作文の例と一緒に読みながら、「項目」「割合」「増えている」など特徴的なことばを説明します。生徒が表やグラフから新たな気づきをした場合には、その生徒が言いたいことを拾って、表やグラフを説明する言い方で言い直すことも有効です。

例:「最近では家で植物を育てる家族が多くなった?」→「最近では家で植物を育てる家族が増えている?」／「32%、水やり」→「水やりは全体の32%」

**8 課****Step 2**

- ・災害を調べると専門的な用語が多数出てきます。難しいと躊躇するところではありますが、日本で暮らすなら覚えておいたほうがいい重要な言葉もあります。冒頭の「全課に共通する点」でも触れましたが、「やさしい日本語」を web 検索時のキーワードに加える、支援者がやさしい日本語で説明する、翻訳アプリを使用するといった方法で対応しましょう。
- ・この課では、特定の災害について、起こった出来事を網羅的に詳細に説明するのではなく、どのような災害が日本や母国、ひいては世界で起きているかを知って、要点をコンパクトにまとめて報告する経験にします。「情報を調べて報告する力」は生徒の将来にとって必要な力といえます。
- ・本教材の作文は「内閣府 防災情報のページ 平成 29 年 7 月九州北部豪雨の被害状況と対応等について」(<https://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h29/88/disaster.htm>)をもとに作成しているため、「福岡県、大分県、死者 37 名、行方不明者 4 名」としてありますが、「平成 30 年版 防災白書」([https://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h30/honbu\\_n/Ob\\_2s\\_01\\_00.html](https://www.bousai.go.jp/kaigirep/hakusho/h30/honbu_n/Ob_2s_01_00.html))では、「死者 40 名、行方不明者 2 名」となっています。
- ・インターネット等で調べたことをポストイットに1つずつメモし、その後、その中から作文で取り上げる事柄を取捨選択すると頭の中での整理もしやすいでしょう。

**9 課****Step 2****トピックとキーワード**

「環境問題」の具体的なイメージがわからない生徒には、支援者の方から身近な例を示しましょう。そして、環境保護の理由と課題について紹介してから(地ならししてから)、生徒のエピソードを聞いていきましょう。

**10 課****【中学生向け】****Step2**

高校入試の面接では聞かれることがある程度決まっているため、ここでは⇒で添えたほうがよい

ことを示しました。理由と具体的な経験を意識して生徒と書き進めます。なお、Step2のメモは生徒が発想しやすい順に質問が並んでいます。その後、Step3 と Step4 でよく見られる質問順に並び替えたり、まとめたりしています。また、Step1 のフクロウの吹き出しにある通り、外国ルーツであることの強みや経験をアピールするというと、是非支援者の方からも伝えてください。生徒の自信にもつながるでしょう。

#### Step5

外国につながる生徒の進学については「多言語高校進学ガイダンス」「外国につながる生徒のための高校進学ガイダンス」などで検索すると、ガイダンスを実施しているいろいろな地域の情報にたどり着けます。検索ワードに地域を加えると情報が絞れますが、ガイダンスを実施していない地域も多いため、実施している地域の情報を見ても役に立つと思います。入試時期や入試の流れなどは早めに紹介しておくといいです。

#### 【高校生向け】

#### Step2

メモは生徒と話す際、自然な流れで話せると想定される順で問いかけています。Step3 のアウトラインで、このメモをもとに構成をしっかり固めます。

#### Step5

大学進学等については東京学芸大学の HP にある「高等学校における外国人生徒等の受入の手引」が参考になります。また、入試時期や入試の流れなどは早めに紹介しておくといいです。なお、「偏差値」とは何か、それをどう生かすかといった情報も提供し、助言するようにするといいです。学費等に悩む生徒には奨学金の情報も提供しましょう。認定 NPO 法人多文化共生教育ネットワーク かながわのHPにある「お役立ち情報：外国人が受けられる奨学金に関する資料」なども参考になります。

## 11 課

### Step 2

問いに沿って、「どんなことば?」「いつ使う?」「誰に使う?」といった具体的な問いかけをして、母語や日本語(ここでは敬語や敬語のようなことば)に関する知識や体験を引き出し、ことばに意識を向けるようにします。たくさん気づきがなくともかまいません。Step2 の目的は、普段あまり考えたことがない敬語や母語の待遇表現に思いをはせてみることです。日本の言語文化の中に敬語といった待遇的な配慮をすることばがあるという意識づけができれば、それを母語と対照することで、母語に対する意識を育てるきっかけにもなるでしょう。手順としてはこの Step2 で生徒の印象、感想、考えを引き出したあとに Step3 で、それらをアウトラインとしてまとめていきます。字数はあまり気にしなくてかまいません。「気づけたこと、考えられたこと」が少しでもあって、それを文章にすることを目標とします。完成した作文を日本人生徒やほかの外国につながる生徒との間で共有することで、多文化多言語交流につながられます。

## 12 課

## Step 2

- ・言語を分析的に見ることに慣れていないことを念頭に、文字の数、種類、歴史などを具体的に生徒に質問していき、生徒が知らない場合は調べて、メモするように促します。その後、それを日本語の文字と比べ、次に語彙(ことば)の違いを聞くといったステップを踏むようにするといいです。生徒が比較対象となる語彙が思い浮かばない場合には、「日本語はこうだけど、どう?」というように、日本語の特徴を、母語について考えるヒントにするといいでしょう。
  - ・言語について分析的に考える負担を考慮して、4)では、「文字かことばのどちらかについて」意見や感想を書くように指示していますが、文字とことばの両方について書きたい生徒にはそのようにさせてください。
- また、話題(タイトル)として文字とことばの2つをとりあげることが負担、不適当な場合などは、文字かことばの1つを話題としてください。

## 【初級後半レベルの日本語力を想定した作文例(1 課 興味があるポップカルチャー)】

本教材 p.(8)の留意点「褒める」で触れたように、「その生徒なりに考え、理由とともに、とにかくひとまとまりの文章にする」ということが最も重要となります。

これを踏まえ、こちらに「日本語文章難易度判別システム」(<http://jreadability.net>)にて、初級後半と判定された作文例を示します。(「きめつのやいば」をA、「ぜんいつ」をBとして判定)

生徒の中には作文が苦手、書くことが苦手という生徒も少なからずいます。また全体としてはよくできているように見えても、作文となると、日本語力が一段下がるという生徒もいます。そうした生徒の作文を書く力、考える力を育てるためには、「励まし」と「褒め」が有効です。以下の作文例にも、「主張」「理由」「事実」といった論理的な文章として必要な要素が盛り込まれています。この作文例を参考に、担当している生徒さんが書き上げた作文の良い点を見つけて褒めていただければと思います。

## —作文例—

私はアニメを見るのが好きです。元気をもらえるからです。

アニメの中で、特に「きめつのやいば」が好きです。「きめつのやいば」はおにがしゅじんこうの家族をころします。そして妹はおにになります。しゅじんこうはとても悲しいですが、なかまといっしょにおにとたたかいます。

私はしゅじんこうのなかまのなかで、ぜんいつがいちばん好きです。ぜんいつはすぐなきます。でも、最後はおにとたたかって、かちます。強くてやさしくて、かっこいいです。

私もすぐなかくので、ぜんいつとにっています。だから、問題があったとき、ぜんいつを思い出します。そして、がんばろうと思います。

アニメを見たら、元気になります。ぜひ見てください。

## 【よくあるお悩み】

## ・作文活動に適切な生徒の人数

基本的には、作文を書く作業は、支援者のサポートを受けながら生徒が一人で行うことを想定しています。理由は作文活動を進める速度が生徒によって異なるからです。複数人で、ある決まった時間内で作文活動を進める場合には、Step 毎に想定時間を決めて、作業が遅い生徒には、ほかの生徒も交えてアドバイスや案を提供するなど、作業工程をできるだけ揃えるようにするといいかもできません。もしグループの中に個人作業を好む生徒がいて、その生徒の書くペースが遅い場合には個別対応し、はやく終わったほかの生徒は別途コメントし合う時間を設けるなどします。このような場合は、その一人の生徒へのコメントは支援者がするか、別の機会にほかの生徒に求めるなど配慮するといいでしょう。

## ・極端に書くのが苦手な生徒や日本語で書くことに負担を感じる生徒に対しての声かけ

極端に書くのが苦手な生徒を対象とする場合には、各 Step をゆっくりしたペースで進めてください。そして、小さいことでも褒めながら書く作業を進めてください。母語で考えられる力と、それを日本語にする力に差がある場合、フラストレーションを感じる生徒もいます。極端に書くのが苦手な生徒も同様ですが、論理的な文章を書く力は将来必要になる（大学進学や、仕事の報告など社会に出てからもいろいろな場面で必要になる）といった話を交えながら、主張（意見）と根拠（理由）、具体例など必須事項を最低限書けた（ひとまとまりの文章にできた）時点で褒めてください。なお本冊 p.(8)の留意点「寄り添う」で触れたように、まず母語で書いてみることも有効かと思えます。

## ・シェアやフィードバックのしかた

作文を書く作業自体は個人作業ですが、Step1（ウォームアップ）や Step5（作文のシェア）などは、ほかの生徒や支援者と会話したり、作文をみんなで共有したりするよう促しています。Step1の導入部では、そんなに話が盛り上がりなくても問題はありますが、Step5で、一人の生徒が自分の作文を読み上げたあと、ほかの生徒から全く反応が返らないという状況は望ましくありません。そのような場合には、支援者のほうで、ほかの生徒から感想をもらいながら、会話を広げてください。

例：支援者：聞いて、どう思った？

生徒 A：おもしろかった。

支援者：そう。何がおもしろかった？

生徒 A：〇〇

支援者：ほかのみんなもおもしろかった？…

そして、最後に支援者からも、よかった点を伝えてあげてください。

また、8 課の災害の報告や、11 課、12 課の言語の比較などは、生徒の作文で使われる語彙や表現などの難易度が上がる可能性があります。生徒間の日本語力の差が大きく、日本語力がそんなに高くない生徒が理解できそうもないと判断した場合には語彙や表現が難しい作文は支援者や教師のみと共有するようにするといいでしょう。ただし、クラスのダイナミクスもありますので、ほかの生徒にもシェアしたほうがよいと思われる場合には、クラスで読み上げたあとに支援者や教師がやさしい日本語で伝え直すなどして対応する、当該生徒に適宜写真やイラスト、板書などを交えて補

足してもらう、母語が共通の生徒の場合、母語でも共有してもらうといった工夫が必要になるかと思  
います。

・生徒、それぞれに合ったサポートのしかた

「全課に共通する点」の(1)でも触れましたが、その生徒の日本語レベルと性格(少しでも難し  
いと臆してしまうとか、向上心が高いタイプとか)を見ながら、その話題に関する語彙や表現を、その  
生徒の負担感に合わせて、学ぶことにつなげてください。生徒が専門的な話題に入っていき足場掛  
けとなる重要な作業です……という、支援者の方々も生徒も「できるかな?」と気負ってしまいそう  
ですが、ひとつでも学びにつながれば……という気楽な気持ちで、楽しみながら臨んでいただけれ  
ばと思います。

以上、著者の経験から思いつく点について補足させていただきましたが、作文練習帳を進めるう  
えで、何か参考にしていただける点がありましたら幸甚です。